

特五

756

実書

256

237

實威

知西方十萬億諸國遠くはまの道

あきらまて已に身乃任危の國貴

賤群集の稱名の聲下りて徳と

乃法の場 守りまことよ極致不

捨るの早し ちるひまねる 陽るべき

獨り前原佛乃はみと尋ねるまじく



たのしく帰る法乃場。おぼしきぬも
心す推すの綱。まもるへまやかぬ。志ら
ぬひことも渡さる。世田ゆづ法の舟
浮き。深き道にゆく。新筆致
遠く。まことの孤雲乃上。聖の来。運を
落日の前。あらたき。やま。あとも。又。雲
雲乃。ま。い。い。や。鐘の音。人。心。乃。色。

のまごいけづくの聴。固もと。ゆへ
げ。あ。い。だ。よ。ま。ら。居。若。ま。若。乃。浪。の
宰。も。つ。び。の。法。の。場。ま。う。く。あ。う。ら。え
や。聴。ま。い。き。ん。一。人。会。称。名。の。聲。乃。う。ち。ま
接。取。の。ま。用。曇。ら。ぬ。其。若。眼。の。通
路。あ。ほ。ま。わ。く。ぬ。あ。あ。ら。ん。ぶ。う。く。も
う。い。の。遅。く。た。ま。愛。と。ま。い。り。ま。う。る。ま

米穀國の米穀がとよひの歡喜を
あはれんぬるに其の報の旨の
又^早改めしむるの事。口借社に入
る^早に請ふ申す。金銀の至極さるる
事。あらんぬるに其の旨の事。あら
んぬるに其の旨の事。あらんぬる
に其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。
あらんぬるに其の旨の事。あら
んぬるに其の旨の事。あらんぬる
に其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。

くさるる。その事。あらんぬるに
其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。
あらんぬるに其の旨の事。あら
んぬるに其の旨の事。あらんぬる
に其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。
あらんぬるに其の旨の事。あら
んぬるに其の旨の事。あらんぬる
に其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。
あらんぬるに其の旨の事。あら
んぬるに其の旨の事。あらんぬる
に其の旨の事。あらんぬるに其の
旨の事。あらんぬるに其の旨の事。

引^平の平家乃侍ら^{サマニ}あての^{シテ}名將^{ナシヤウ}を
 軍物語の益^{イタダキ}取^{トル}れたもの^{シテ}を名業^{ナノウ}人
 とい^{シテ}おぼ^シら^シい^テ其^ノ威^ヲを^シて^シあ^リあ^リ
 池^イ球^{クウ}も^モく^ク鬘^{マシ}鬘^{マシ}も^モ儀^イを^シた^リあ^リ
 かね^カの^ノ執^シ心^{シン}跡^{アト}も^モさ^シる^ルが^ガ今^{イマ}も^モあ^リ
 どの^ノ人^ニは^ハま^まほ^うの^ノこ^ゝへ^へい^いら^せて
 備^{ツク}とも^ノ人^ノは^ハま^まく^くあ^りあ^り 眞^{マコト}實^{マコト}也^{ナリ}

木^キ乃^ノ其^ノ櫛^シと^トい^フる^ルは^ハま^まく^くあ^りあ^り 櫛^シハ^ハ花^{ハナ}
 子^コ顯^ハきた^リたる^ル老^オ木^キと^トい^フれ^ルは^ハ病^{ヤマイ}を^シま^す
^早カ^ルに^シて^シあ^リあ^リの^ノ威^ヲを^シて^シあ^リあ^リの^ノ物^{モノ}
 語^{コト}人^ト乃^ノう^ラう^ラい^ハし^テ思^ヒの^ノう^ラい^ハし^テあ^リあ^リ
 ま^まの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^り
 其^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^り
 が^ガあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^りの^ノあ^りあ^り

魄き此中なるまゝにして 早かる 執心乃

圖像の世は 二 百余年の程も過ぎ

うらひまを 早 して藤原の世なるあぶ

浪の 早 ありて書もわづかに周の

夢 早 をたかく 早 現たあはれ思ひの

藤原乃 早 若葉の 早 おの翁さびしく人

あはれ 早 假初 早 あらわれ出たる 早 天威

おの 早 藤原 早 給ふ 早 なむ 早 世語も 早 せむ

う 早 として 早 焚 早 焚 早 とも 早 行 早 かん 早 せん

藤原乃 早 油の 早 世 早 して 早 染 早 ま 早 ぼ 早 う

成 早 て 早 後 早 には 早 せ 早 り 早 思 早 へ 早 り 早 思 早 へ 早 り

名 早 あり 早 藤原 早 なる 早 ち 早 ら 早 ぬ 早 し 早 藤原

世 早 乃 早 邊 早 の 早 法 早 乃 早 状 早 なく 早 かり 早 ず 早 頼

世 早 終 早 なる 早 世 早 なる 早 用 早 ひ 早 乃 早 初

まはらと 埋もる人 世を渡る
てはなぬ けしき けしき けしき
患の ねん 浮く たら 給ふ
是程は まる あり あり あり
人を 更に見 せし せし せし
乃こ 明る 又も 笑も 涙の
心 鬚白 ます 老 暮 あり
其 出

まはらと 埋もる人 世を渡る
てはなぬ けしき けしき けしき
患の ねん 浮く たら 給ふ
是程は まる あり あり あり
人を 更に見 せし せし せし
乃こ 明る 又も 笑も 涙の
心 鬚白 ます 老 暮 あり
其 出

至らばいさき 刻念延陀
見滅量罪則 向参新
時至くこころひ遠
物まひあられ 悔の物語
乃草の蔭野乃露 有様
語りやん 戦破

初らば海氏乃方 手塚の大島
木曾殿の由前 杉原の威社
亭異乃曲者 組首とつぐ
大将とみまづ 勢もあつた
思へば錦乃直意 志のまこと
責め終よあつた 聲の坂東
みつてのち 木曾殿天晴 長井の秋

故家當つて感さくや有後。感らるる鬢
鬢の白髪たる入まら黒くして不審めれ
樋口は高へ見をたらしとして
あぞ樋口まあり。唯一目みる。後とら
さらとあらめて。あまじき。あな。故
別。故さく作さるる。感さるる
申し。六十は。髪。軍。と。さ。ば。若。殿

感あらそひて。は。さ。ま。し。も。お。
あ。ま。じ。き。あ。な。故。別。故。さ。く。作。さ。る。る。
申。し。六。十。は。髪。軍。と。さ。ば。若。殿
は。さ。ま。し。も。お。
あ。ま。じ。き。あ。な。故。別。故。さ。く。作。さ。る。る。
申。し。六。十。は。髪。軍。と。さ。ば。若。殿
は。さ。ま。し。も。お。
あ。ま。じ。き。あ。な。故。別。故。さ。く。作。さ。る。る。
申。し。六。十。は。髪。軍。と。さ。ば。若。殿

岸は際まで氷のみぎり毛陰うつる柳
乃糸の枝たれて 氣散れしき風
新柳の髪を捲き氷清ては波奮
響乃ひきぎとあらひてこれ墨も流
まねらるる茶乃白髪と成りまきり
上へんを惜むと弓を引くはかくこそ
多へまればあらもけりやとて皆感

涙もろく流しきる又々威が錦
の直密とてさるる私あらぬ感あり
中々威都をとり時々威公より探古
郷への錦をまきて帰るるる本文
あつる威は國志都前乃去りて作
ひがを年伊領よりまらせて
は長井より居住はり作まの此度水國よ

みどりまてのりて定めて詠死はるべし
孝厚の思出是より下流をあらわす
中よりば赤地の錦乃直雲とく
だくはる魚然まて古予もとせ
みぢ紫をむまつゆき錦まて家よ
歸る人もも病と續りも此奉
文の心ありはまて古も朱買屋

錦乃後を糸懸山は翻え今の実
威へをとお國の岐はあげかれあ
まらるる名は夷は方月の月の
よから懺悔物語をなす
懺悔の物語心乃水の底まよく流
を強しゆるあや其執心の修
乃首がぐりくそ又愛は木曾とく

まじとたくろ手塚めは陽らき
志多入る人ふあるに
おのる中あり先きとせ
光威ト命あまのまを付せり
陽よりて空威と押あへて組を
あひつれいとのまき目守一乃町の者
と軍降きよとして、鞍乃前降は押

けり首あたまつて捨るきり
手塚の太助、威が、手平はま
りて、あまのまを揚て、二刀を
威を母とせと組ぐ、二子があひ、どう
と落ちるが、若年者の悲しむる
軍よの志、つれり、凡はち、ある、枯木
の力、えをね、手塚が、志、ある、威

七。良我者落あひて。然も首をばかふ
 朽とけまて。其隆厚乃かこあひて。歌
 毛かろま。まあまあとの影も形も南
 無阿弥陀仏。邦らひくまび給へあ
 とあひて。たび給へ

明治廿二年六月廿五日従
 同 世四年一月廿八日迄 出版御届済
 同 四十三年四月廿五日従
 同 四十四年十月廿五日迄 再版
 同 四十四年三月十五日 別製本御届

不製複



訂正者 親世清



發行兼 印刷者

檜

常之

(特電話二五)
(振替貯金六四三)



256
237

京都市上京区三条通美屋町東北角

